

## コメント

康 保 成

## 張勁松：中国瑤族の祭祀者の身体技法

本論は中国湖南省藍山県過山瑤族の祭祀巫術における身体技法を紹介したもので、その中には祭祀舞、指訣、掌訣、罡歩、画図符、卜卦、上刀梯等が含まれる。ここから分かるのは、省藍山県過山瑤族の祭祀巫術における身体動作の内、一部は指訣の老君訣、祖師訣、八卦掌訣等のように宗教のシンボリック的意味があり、また一部には申団舞（スッポンを演じる踊り）のスッポンを探す、スッポンを弄ぶ、スッポンをさばく、スッポンを料理する、スッポンを食べる等のように生活の模倣的な行為であることである。本論では、上記二種類の状況をそれぞれ「会意」と「象形」と呼んでいる。

本論は請祖師神聖舞等について比較的詳しい説明を行った上で、最後に「瑤族の祭祀巫術の身体技法には一定の規範があり、様々な法器の持ち方、四肢の動きと足の運び方にはみな決まりがあって、随意に行うことはできない」と指摘している。しかし、「師承の違いにより、一部の訣には異なる組み方がある」とも述べている。これは、瑤族巫術の身体表現は師承と流派によって決まると理解してよいのであろうか。

身体表現は、非言語的な意志の表現手段とすることができるのであろうか。中国人はよく「言葉と自己の行為の両方で教育する」といい、また「模範」、「身をもって範を示す」等の言い方をする。このことから時として身体表現が言語表現より重要であることが分かる。身体動作の美学的な表現が舞踊であり、舞踊の起源は巫術である。張先生の論文から、私達は巫術と舞踊の密接な関係を理解することができた。

張先生の論文は挿絵が豊富で文章も優れているため、イメージしやすくまた強い説得力を感じる。

## 田耕旭：韓国の祭祀芸能における身体技法

## — 韓国仮面劇に登場する神的存在の身体技法 —

本論は韓国仮面劇に登場する神的存在の身体技法を総合的に分析したものである。本論は韓国仮面劇に対する中国の儺礼の影響を大変重視し、韓国仮面劇の伝統祭礼と儺礼に由来する二つの類型に言及している。筆者はさらに韓国仮面劇の二つの形態について次のように述べている。一つは、閻氏、江陵官奴仮面劇で使う仮面、南江老人、蓮葉、目ばたき等に代表される形態で、人物の形態や機能などの面で神的存在の外形を全面的に現している。もう一つは、酔発や八墨僧などに代表される形態で、その身分、性格、形態はすでに俗化されているが、なお神的存在としての機能を維持している。そして元来儺礼において鬼払いの主人公である鐘馗の妹は、仮面劇においては神的な性格を失い、完全に世俗化している。

本論ではまた、仮面の容貌や色を様々な身体動作と関連付けて、駆儺と仮面劇の関係を重点的に論じている。例えば、まばたきの容貌が方相氏の黄金四目を連想させ、八墨僧の相互の打ち合い、特に柳や桃の木の枝による打ち合いが、駆儺の際の鬼を打つ動作の影響等を受けているという論には、大変説得力がある。

私が指摘したいことは、中国における「鐘馗嫁妹（鐘馗が妹を嫁に出す）」は実のところ「鐘馗嫁魅（鐘馗

が鬼を追い出す)」に対する誤解から生まれたということである。「魅」は鬼のことで、「嫁魅」とは鬼のたたりを転嫁して駆逐することである。しかし、「妹」と「魅（鬼のこと）」は同じ音で、「嫁」は出すという意味と嫁ぐという二つの意味がある。加えて宗教観念が民間において薄まったため、人々は意識するともなく「嫁妹（妹を嫁に出す）」と「嫁魅（鬼を追い出す）」を混同し、「嫁妹」を「嫁魅」に替えて、鐘馗が自分の妹を嫁に出すという物語を作り出したのである。田先生が述べているように、韓国の「小妹」は完全に世俗化した女性である。彼女も中国の世俗物語の影響を受けたのかどうか、更に研究する価値があると思われる。

## 大谷津早苗：人形に見る身体技法—日中の比較から—

本論は日本の文楽－人形浄瑠璃（人形劇）の身体技法について研究したもので、主に人形の三番叟の特徴を論じ、そこから三番叟という人形の起源を論証している。そして、三つの側面から、人形の三番叟は能楽の式三番の影響を受けてはいるものの両者は別物であると、指摘している。第一に、能楽では三つの役柄が一緒に登場するが、人形劇では三つの役柄が単独で登場することが多い。第二に、うなづきの形式に関して、最古の「偃齒棒式」（顔を上へ向ける）の動作は三番叟という人形に多く残されているが、千歳と翁のうなづき形式は同一ではない。同時に三番叟という人形には威嚇と滑稽等の表情変化があるが、能楽の三番叟には笑いの表情だけで威嚇の表情がない点が異なる。第三に、三番叟という人形の顔色は赤色もしくはその変形の肌色があるが、能楽の三番叟には赤系の彩色はない。本論ではこの特徴から、人形劇の式三番の内、三番叟という人形は当初宗教的な人形として生まれ、他の役柄は後に付け加えられたのではないかと推定している。さらに日本の人形劇における「偃齒棒式」が中国の人形劇に見られないことについては、今後引き続き研究の必要があるのではないかと指摘している。

筆者は三番叟という人形の特徴を鋭くとらえ、その視角はユニークで、結論は斬新である。

中国では人形は傀儡とも呼ばれ、研究によると上古（殷・周・秦・漢）時代の副葬用人形に起源をもつと言われている。『後漢書』には傀儡劇は元来忌中の家の娯楽で、漢末に酒席で演じられるようになったと記されている。日本では、大江匡房が11世紀に著した『傀儡子記』で、いわゆる「傀儡子」とは本来「北狄」から来た人々のことを言い、また女性の身体表現、すなわち「女性の細長く描いた眉、目の下に涙を流した様に施した化粧、下肢で上体を支えられないかのようによろめきながら歩くこと、齒を見せて口を歪めて笑うこと」を示すと記されている。これは日本の人形劇における身体表現と何らかの関係があるのだろうか。

この他、人形劇における身体表現の最大の特徴には二つある。一つは、人形はほんとうの人間ではなく、背後で人間が操っているため、実際は人形の身体表現で人間の思想を婉曲的に反映していることである。もう一つは、本当の人間と比べると、人形の動作と表情を様々につくることができるが制限もあるため、特殊な身体表現となっていることである。

※ 括弧内の下線部は訳者注